

徳富健次郎著

自然と人生

東京民友社發行

蘆花生着

自然と人生

精選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年4月20日 印刷

昭和55年5月1日 発行

(第11刷)

徳富蘆花著

自然と人生

民友社版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場4-3-55 代表者 小 田 切 進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲 垣 達 郎
総発売元	株式会社 ほ る ぶ 東京都新宿区新宿2-19-13 代表者 中 森 蒔 人
製 作	株式会社 ほるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

目次

灰 燼

一

自然に對する五分時

一、此頃の富士の曙……………六七

二、大河……………七一

三、利根の秋曉……………七三

四、上州の山……………七六

五、空山流水……………七七

六、大海の出日……………七九

七、相模灘の落日……………八一

八、雜木林……………八七

九、機溜……………	九〇
一〇、春の悲哀……………	九一
一一、自然の聲……………	九二
一、高根の風雨……………	九二
二、碓氷の川音……………	九五
一二、栗……………	九八
一三、梅……………	一〇一
一四、風……………	一〇二
一五、自然の色……………	一〇三
一、春雨後の上州……………	一〇三
二、八汐の花……………	一〇五
三、相摸灘の夕焼……………	一〇七
一六、山百合……………	一一一

一七、朝霜	一一八
一八、蘆花	一二〇
一九、海と岩	一二三
二〇、榛の木	一二六
二一、薄	一二八
二二、夏夜	一三〇
二三、香山三日の雪	一三三
二四、五月の雪	一四五
二五、香山の朝	一四七
二六、相摸灘の水蒸氣	一四九
二七、富士の倒影	一五二
二八、四ッ手網	一五五
二九、田家の煙	一五九

寫生帖

一、哀音……………	一六一
二、可憐兒……………	一六五
三、海運橋……………	一七一
四、櫻……………	一七四
五、兄弟……………	一七七
六、吾家の富……………	一八二
七、國家と個人……………	一八七
八、斷崖……………	一九〇
九、晚秋初冬……………	二〇一
一〇、夏の興……………	二〇六
一一、雨後の月……………	二一九

湘南雜筆

一、元旦……………二五七

二、冬威……………二五八

三、霜の朝……………二六〇

四、伊豆の山火……………二六二

五、鑼日……………二六三

六、初午……………二六六

七、立春……………二六七

八、雪の日……………二六九

九、雪の明くる日……………二七一

一〇、初春の雨……………二七三

一一、初春の山……………二七五

一二、三月節句	二七七
一三、春の海	二七九
一四、彼岸	二八一
一五、伊勢參宮	二八三
一六、磯の潮干	二八六
一七、沙濱の潮干	二八九
一八、花月の夜	二九四
一九、新樹	二九六
二〇、暮春の野	三〇〇
二一、蒼々茫々の夕	三〇二
二二、夕山の百合	三〇四
二三、梅雨の頃	三〇六
二四、夏	三〇八

二五、涼しき夕	三二〇
二六、立秋	三一二
二七、迎火	三二三
二八、舟を川に浮ぶ	三一五
二九、夏去り秋来る	三一六
三〇、秋分	三一七
三一、鰻釣り	三一九
三二、海さ合戦	三三三
三三、秋漸く深し	三五七
三四、富士雪を帯ぶ	三五九
三五、風	三六一
三六、風の後	三六三
三七、月を帯ぶ白菊	三六五

三八、暮秋	三六六
三九、透明、凜然	三六七
四〇、秋晩の佳日	三六八
四一、時雨の日	三七三
四二、寒星	三七四
四三、寒月	三七五
四四、嵐の湘海	三七七
四五、寒樹	三八〇
四六、冬至	三八一
四七、歳除	三八二
風景畫家・コロオ	三八三

灰 燼

(上) の 一

勝てば官軍負けては賊の名を負はされて、思ひ出づれば去ぬる二月
降り積む雪を落花と蹴散らして魔城を出でし一萬五千の健兒も此處
に傷き彼處に死し、果ては四方より狩り立てらるゝ怒猪の牙を咬む
でこゝ日州永井の一村に楯籠りしが、今は彈盡き糧盡き、勢盡きて、
大方は白旗を樹てける中に、せめて一期の思出に稻麻竹葦の此重圍
をば見事蹴破つて、我此翁と故山の土にならばやと、残る一隊三百

餘人、草鞋の紐緊々と引しめ、明治十年八月十七日の夜をこめて月影闇き可愛が嶽の山路にかゝりぬ。

小荷駄をば一切取り棄てつ。各自に糧囊を帯び、銃を提げ、大刀を釣り、松明も點さず、言はず。土人を案内として桐野真先に立てば、薩摩緋の單衣に紺染の兵兒帶一尺餘りの小脇差を腰にぼつこみ尻高々どからげて煙草吸ひく中軍をうつ南洲、村田貴島別府河野野村山野田坂田増田の諸將前後を擁し、殿には逸見の一隊。假令鐵壁にもあれ、我前に立たん程のものは蹴破つて行かむものと思ひ込むでは、坐ろに打咲まれつ。

進軍を決したるは午後四時。先鋒已に可愛が嶽の麓にかゝれば、夜

は闌けて星河一天、山黒くして月幽に、風露肌に冷やかなり。敵も
 眠らず、見よや、山又山に燃し列ねたる篝火點々として星を欺むき。
 左右の嶺より敵の哨兵が探りうつ銃聲は斷間もなく呀に響く。絶頂
 までは二里にあまる、夜明けぬ間に急げ急げと、峻岨の夜道山路事
 ともせず、今後隊の一人が岩角に足踏み込らして谷に落ちしをも知
 らで、六百の草鞋宛ながら「明けぬ間、明けぬ間」と囁やき、谷を陟り
 峯を攀ぢ、青葉落葉をかき分け踏み分け、次第に上り上り上り――
 月傾きて、短夜の明けんとす。

(上) の二

短夜の月傾くと思へば、何時か山の端白らみ、曉寒き風にほろく
と滾るゝ葉末の車、未だほの闇き谷の岩が根に倒れし男の頬を傳ふ
て自づから口に入れば、唇顫ひ、手足動きて、何かは知らず唸やき
しが、忽ち

「阿母、唯今——」

瞭然と呼ぶ吾聲にはつと眼を睜らき、やをら起き上つて四邊見廻は
し、空打仰ぎて吻と一息、

「歸る、歸る——と思つたが——矢張先刻落ちた儘氣絶しちまつた

んだな。——あゝ最早黎明だ」

舌鼓打鳴らして、立上り、腰のあたり五六つ打たゝき、手をふり、足を踏み試み、其處ら探して落ちたる銃を探り上げ、行かんとして、忽ち山の端遠き咄喊の聲に耳傾けしが、

「やつ、後れた！」

叫びもあへず、手早く草鞋の紐しめ直し、背負へる大刀をゆり上げ、滑る足を踏しめく、木の枝傳ふて谷間を攀ち上りぬ。

十歩行きては立どまり、二十歩上りては耳を傾け、谷を陟りて嶺にかゝれば、夜はまさくと明け離れて、萬山の朝靜かに、やがて朝日杲々とさし上りて、山鳥の聲其處此處に聞へたり。赤松の根に銃

を杖つきて、息つきあへず、屹と耳を澄す。年は十八許、面瘡せて見ふれど眉目清らに、垢染みたる洋服の上に白木綿の兵兒帶して、脚絆草鞋に身を固め、網袋と草鞋一足腰につけ、太き眞田の紐もて朱鞘の太刀を肩より釣りたり。

良久しく耳傾けしが、物音はつたり絶えたるに、失望の色顔にあらはれ、

「些も聞へん——最早破つたな。つゝ、後れた、後れた。たしか三田井に出るんだつたが、三田井と云ふは何方か知らん」

力なげに呟やきつゝ、不知案内の山路足に任せて十町あまり上れば、山いよく静かになりぬ。唯一度、仄かに銃聲の響ける様に思ひし